

だんじり祭

だんじり祭の始まりと
岸和田型地車

全国に名高い岸和田のだんじり祭。祭礼に繰り出されるその地車は、旧摂津・河内・和泉と奈良県、和歌山県北部にかけて約900台が現存し、各地区でだんじり祭が行われています。

岸和田といえば「だんじり祭」。岸和田の人々は約300年の歴史と伝統を受け継ぎ、時代の変化とともにその姿を変えつつ、この祭りを大切に育んできました。地元の祭礼関係者は一年中この祭りのために準備し、待ちに待った祭礼当日は、全国からの見物客で大いに沸き立ちます。岸和田のだんじり祭は、日本を代表する神賑わいの一つです。

日程については例外はありませんが、神戸市灘区や東灘区では5月初旬、大阪市内は7月の夏祭、泉州や河内内では9〜10月の秋に催行されます。岸和田市に限ると、岸和田地区(22町)と春木地区(12町)が「9月祭礼」、それ以外の地区は「10月祭礼」です。

岸和田のだんじり祭の始まりは諸説あり、その一つに元禄16年(1703)、第三代藩主・岡部長泰が、城内に建つ三の丸神社に京都の伏見稲荷を勧請した際、城下の人々に参拝を許したのが始まりと伝わっています。その当初の祭礼の様子はさだかではありませんが、江戸中期の1700年代半ば以降の記録には「引壇尻」か「ひ壇尻」などの記載が登場します。現在の形に近い地車になったのは天明5年(1785)。北町の油屋治兵衛が大津村(泉大津)から古地車を借りて城入りしようとするも、背が高く城門をくぐれない。そこで急ぎよ柱を造り替え城内に曳き入れました。さらに翌年その屋根の高さを上げ下げできる「からくり地車」を新調。これが現在に繋がる岸和田型地車の原型と考えられています。



令和4年(2022)の年番長・中之濱町だんじり。令和元年(2019)撮影

各地区紹介

9月祭礼
岸和田地区(22町)
宮本町、上町、五軒屋町、北町、堺町、本町、南町、大北町、中北町、大手町、紙屋町、中之濱町、中町、大工町、沼町、筋海町、下野町、並松町、藤井町、別所町、南上町、春木南
【宮入り神社】岸城神社、岸和田天神宮、弥栄神社

10月祭礼
東岸和田地区(11町)
土生町、畑町、極楽寺町、流木町、八田町、真上町、神須屋町、土生瀧町、阿間河瀧町、葛城町、作才町
【宮入り神社】波多神社、土生神社、意賀美神社、矢代守神社、岸和田天神宮

10月祭礼
山滝地区(2町)
内畑町、大澤町
【宮入り神社】山直神社、大沢菅原神社

10月祭礼
南掃守地区(8町)
尾生町、中尾生町、福田町、西之内町、下松町、八阪町、上松町、山下町
【宮入り神社】菅原神社(尾生町)、菅原神社(上松町)、兵主神社、岸和田天神宮

10月祭礼
八木地区(11町)
中井町、吉井町、荒木町、下池田町、箕土路町、西大路町、小松里町、額町、額原町、大町、池尻町
【宮入り神社】夜疑神社

9月祭礼
春木地区(12町)
春木大小路町、春木本町、春木中町、春木宮本町、戎町、八幡町、松風町、大道町、磯之上町、春木若松町、春木旭町、春木宮川町
【宮入り神社】弥栄神社

10月祭礼
山直南地区(5町)
包近町、山直中町、稲葉町東、稲葉町西、横川町
【宮入り神社】横川神社、中村神社(山直中神社)、菅原神社(稲葉町)、楠本神社

10月祭礼
山直地区(8町)
岡山町山出小路、岡山町大西小路、岡山町東出小路、摩湯町、田治米町、三田町、小倉最寄、今木町
【宮入り神社】菅原神社(岡山町)、淡路神社、菅原神社(田治米町)、菅原神社(穂積神社)、菅原神社(今木町)

※掲載内容は2022年現在の情報です ※町名・宮入り神社の掲載は順不同

岸和田型地車の魅力とやり回しの迫力

「岸和田のだんじりは彫物良うて木が良うて 舵艇子上手で よう飛ばす」昔から地元の人々に歌われていたが、これはだんじり祭の魅力を表す名文句です。

地車は選りすぐりのケヤキ材が使われ、土台やコマという足回りを除いたすべての部分には、精巧な彫物が彫られています。地車に組まれる建築部材の数は300を超え、これは全国に数ある山車や地車の中でも類を見ない多さで、地元の彫刻師と地車大工がその「匠の技」を競っています。

モチーフやテーマは龍や唐獅子、鳳凰などの霊獣、花鳥風月、十二支の干支に七福神、神話や源平合戦をはじめとする軍記物等。特に「土呂幕」や「見送り」など大きな彫刻を施された部位はみどころで、豊臣秀吉が主人公の『太閤記』に真田幸村、木村重成が活躍する『難波戦記』が好まれるのは、やはり大膽らしい土地柄といえます。その絢爛豪華な地車は、高さも長さも4m弱、約4tの重さで、それを豪快にやり回しします。つまり曲がり角に差しかかる一旦停止して、そこから一気に速度を上げてゆき、勢いよく方向転換します。

綱を曳く子どもから青年団まで総勢数百人の曳き手、曲がる際に前コマに檜材の艇子を差し込み「きっかけ」を作る左右の前艇子、後ろに突き出たカシの棒を操る30人ほどの後艇子、そして高さ約4mの屋根の上で飛びはね踊り方向転換の合図をする大工方…。ハンドルとブレーキ、アクセルが別々の受け持ちパートであるすべての曳き手たちが二つに気を合わせて「伝統の技と度胸を競うさまは、あつと息を飲むほどです。古い町家の建物が残る紀州街道を疾走する地車は、岸和田城下ならではの「年に一度」の伝統の光景なのです。



岡部長泰肖像(泉光寺所蔵)。長泰が伏見稲荷を勧請し、城内三の丸に社殿を建立した。これが岸和田のだんじり祭の起源との説がある



『並松今昔物語』のトップページには新調時の記念写真と以下の文面が記されている。「百年の時を経て、なおその輝きは衰えない。先人らの英断に感謝し、まちの宝であるだんじりを、これからの世代へと、そして、そのまた次の世代へと繋いでいきたい」

(右)100年前の新調当時の姿をとどめる並松町の地車。「この角度の姿が一番らしい」とは『並松今昔物語』の写真編集担当の岸田氏の談
(左)お披露目曳行では、昭和～令和の歴代の大工方OBが一同に揃い、その年の法被を披露

100年の岸和田だんじり
並松町地車百年祭

令和3年(2021)7月4日。大修理を終えた並松町地車が、入魂式を兼ねた100周年の式典およびお披露目曳行を行った。コロナ禍の下で緊急事態宣言が繰り返され、満を持しての曳行である。

同時に町内ではその歴史を物語る戦前戦後の約300枚の写真を展示、100周年記念アルバム『並松今昔物語』の編集会議も佳境に入った。編集責任者の谷桂輔氏以下、町会長の玉井良



並松の「松」をデザインした竿頭に、その下には白毛を装い、馬簾は唐紅に白線が入る

製作100周年を迎えた
並松町のだんじりが見てきたもの

だんじり祭 100年の 歩み

各町自慢の地車は、その姿や彫刻、飾り付け、鳴物、そしてやり回しに至るまでのこだわりと誇りがあり、それは歴史そのものでもある。岸和田市市制施行とほぼ同時期に製作された並松町の地車を通して、この100年のだんじりの通史を振り返る

きなケヤキは、早くから入手してずっと保管していた。

時代は大正末期。まさに泉州南部の中心地として市制施行に沸く岸和田は、紡績業や煉瓦工場、海運など活況を呈し、まちは栄え道路も整備された。

この前後に岸和田で地車が次々と新調され、ほぼ現在の岸和田型地車の型式構造となった。現在も引き続き曳行しているのは、岸和田旧市ではこの並松町ほか3台だけとなった。

パндеミックでの自粛と
今後のだんじり祭

新型コロナウイルス感染拡大は、令和2年(2020)の岸和田のだんじり祭を自粛に追い込んだ。

令和3年(2021)の祭礼では9月5日の試験曳きは全町自粛したものの、その後の曳行は、最終的には各町の判断に委ねられた。数町が自粛したり、曳き出しや宮入りだけでなく、大幅に短縮

治氏、副会長の江間一夫氏、若頭から世話人上がったばかりの岸田真樹氏、青年団の倉本伊織氏と、長老から20代まで、世代を超えた編集委員の面々が揃うところを取材させていただいた。

並松町は町の歴史が始まって初めて地車を大正10年(1921)に新調(完成は翌年)。古くは岸和田藩士の居住地「沼村領新屋敷」であり、藩政時代の字には「鉄砲町」「忍町」などがあつた。地車を所有しなかったのだが、士族が少なくなった明治維新後、他町同様に地車所有と曳行の熱意が高まる。明治時代から大正初期には、他町から地車を借りて曳行したとの記録もある。

最大級の
新調地車は
初めての
入母屋型地車

さて「名地車」の呼び声をほいままにする新調地車は、名匠・桜井義國が大

すごみのある唐獅子は見どころの一つ。『巴御前栗津合戦』の巴御前は義國の十八番でもある



する町もあつた。新聞はじめメディアは、2年ぶりのこのだんじり祭についての「観覧自粛と感染対策の徹底」を報じた。

岸和田のだんじり祭の歴史をリアルに振り返ろうと江間氏が、幕末から明治にかけて記された岸和田藩士の『熊沢友雄日記』の中から祭礼の記述を抜粋している。

祭礼の日程は明治5年(1872)の新厩採用に紐付けされる形で、明治9年(1876)に本宮を9月15日にすることが堺県令によって通達された。その後の明治時代は、悪疫流行のために10月に変更されたり、さまざまな社会的な事情で中止になったり、「何が何



見送りの加藤清正の勇姿。風格あふれる彫刻

工棟梁と彫物責任者の両方をこなした。初めて大屋根を入母屋型に組んだ画期的な地車で、9段に組まれた桁組の上には美しい配列の菱形二重扇垂木が並び、他町のそれより「ふたまわりは大きい」地車であった。

「新調はさまざまなタイミングが合致したようです」と語る岸田氏。代々が大工の家系で、大正7年(1918)生まれの祖父の口伝によると、「大きな地車を造ろかい、それも剣道上段の構えのような地車を」であった。確かに姿見はそのとおりである。

彫刻は土呂幕の「巴御前栗津合戦」、見送りの「加藤清正蔚山城の戦い」、そして木鼻の唐獅子と、「明治の甚五郎」と称された義國の技が冴え渡る。それらの巨大な地車の用材となる大

でも祭りをやる」というようなことではなかったことがわかる。

編集中の『並松今昔物語』の序文の予定稿には、「並松町のだんじり百年を祝うにあたり、令和のだんじりを記録にとどめると共に、だんじりだけでなく、この機会に収集した資料や情報をまとめて後世に引き継ぎたいと考えた」とある。

江戸中期に始まった岸和田のだんじり祭は、明治、大正、昭和、平成、そして令和と時代が大きく変わる中で、この並松町のように引き継がれ、これからも継承していくことだろう。

(取材・文＝江弘毅)

“祭りの楽しさが体感できる!”
岸和田だんじり会館

平成5年(1993)オープン。だんじりの展示や大型マルチビジョン、大工方体験など、一年中、だんじり祭の熱気あふれる雰囲気を楽しめる。



春は岸和田城が一年で最も華やかに彩られる季節

誇りにしたい、美景や行事

岸和田にはだんじり祭以外にも、市民に愛され、長く続いている行事が多数あります。ここではその一部をご紹介します。

岸和田の風物詩



堀の周りも桜が咲き誇り、春の散歩にぴったり



岸和田城庭園(八陣の庭)ではライトアップも!

4月1~15日
桜が見ごろの時期に約2週間の催しを開催
お城まつり
岸和田城周辺のソメイヨシノが開花するころに開催。ぼんぼりが点灯され、夜桜が楽しめるほか、八陣の庭の砂地に渦巻きなどの模様を描く青海波体験、のたて野点、演奏など多彩なイベントを行う。

4月上旬の日曜 **11月中旬の日曜**
年2回開催! 商店街がお祭り会場に
どんチャカフェスタ

南海岸和田駅から蛸地蔵駅あたりに広がる5つの商店街の祭り。春と秋に開催。スタンプラリーや出店、フリーマーケット、ミニだんじり曳行など各商店街で趣向を凝らした催しが楽しめる。



商店街が舞台に早変わり! 演奏会なども開催

5月3日
市民参加型の祭り
岸和田市民フェスティバル
第1回目が昭和53年(1978)に開催され、今や春の定番イベントに。岸和田市中央公園でフリーマーケットやミニSL、子どもの遊びコーナーなどが催される。
楽しいステージイベントも要チェック



楽しいステージイベントも要チェック

海側の各施設でさまざまな催しを行う

岸和田港まつり

昭和28年(1953)以来続く祭り。手作り体験やスポーツ体験、ダンスステージ、子ども向けイベントなどさまざまな催しが繰り広げられる。



開催日時やイベントの内容は年によって異なる。写真は令和元年(2019)撮影のもの

11月中~下旬
もみじの名勝・牛滝山大威徳寺で秋を楽しむ催し
牛滝山もみじまつり

古くから紅葉の名勝として知られる牛滝山大威徳寺の境内で、秋に開催される人気の行事。市内外から多くの人々が訪れ、秋の行楽の一日を楽しむ。



もみじに彩られた、室町後期建立の多宝塔は国の重要文化財



赤や橙(だいだい)、黄、緑と色彩豊かな山の紅葉

11月23日
地元の野菜や果物が揃い、遊びも充実
農業まつり

岸和田市中央公園で35年以上開催されているイベント。とれたての野菜や果物がお得に買える即売会のほか、子ども向けの体験、ダンスステージなど、遊び要素がたっぷり。



子どもが楽しめる催しが多く、家族連れにもおすすめ



冬の夜をロマンチックなきらめきが彩る

12~2月
全長約260mの商店街がキラキラと輝く
岸和田駅前通商店街イルミネーション

だんじりが駆け抜けるため天井を約10mと高くした商店街のアーケードに、冬季限定でイルミネーションを点灯。年によっては、プロジェクターを活用して動画も投影する。

知っていますか?
昔ながらの地域の風習
岸和田には古くからの風習がこちらに残っています。最近では後世に伝えるための、取り組みが行われるもの。

雛あらし 日程 3月3日
「ひなさん見せて、豆おくれ」と雛人形を飾っている家庭を回る子どもたちに、大豆とあられを炒ったものを振る舞う。最近ではお菓子を用意することも多い。内畑町や河合町周辺で見られる。

牛神まつり 日程 8月第1日曜
天の川は、久米田池の水を流域の町々に稲作用水として潤しながら流れている。この天の川には七夕伝説に由来する民俗行事が綿々と続き、中井町には今も泉州で唯一の牛神まつりが伝えられている。

葛城踊り 日程 8月14日
江戸時代から塔原町に伝わる降雨を祈願または感謝する踊り。府指定無形民俗文化財。かつては塔原・相川・河合・蕎原・木積の五カ荘で行われていた。塔原においても数度の断絶を経て昭和30年(1955)に復興。華やかな衣装をまとった子どもたちの踊りと囃子が奉納されている。



土生鼓踊り 日程 8月15日前後
土生町に伝わる市指定無形文化財。室町時代、雨乞い後の降雨に喜んだ村人たちが、その場に合った樽や太鼓を叩き、踊ったのが始まりとされている。アクロパティックな樽・太鼓叩きに、音頭や、輪踊りが加わる。



お月見 日程 9月下旬
中秋の名月に各家で飾られるお月見のお供え物を、竿のような長い棒で突いてもらうことができた。今でも山手では、子どもたちが「だんご突かして〜」と家を持ち、月に供えた団子や里芋の煮物を、竹串などで突いていただく風習が残っている。